

抄物資料を活用した日本語文法史研究

古田, 龍啓

<https://hdl.handle.net/2324/7182260>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	古田 龍啓			
論文名	抄物資料を活用した日本語文法史研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	青木 博史
	副査	九州大学	教授	川平 敏文
	副査	九州大学	講師	古川 大吾
	副査	九州大学	教授	上山 あゆみ
	副査	九州大学	名誉教授	高山 倫明

論文審査の結果の要旨

本論文は、「抄物（しょうもの）」と呼ばれる資料群を中心に据え、資料そのものの文献学的考察と、中世後期を中心とした文法史研究の2部構成から成っている。

第I部は、抄物資料研究である。第1章では、清原家における最古の『論語』の抄物である良賢講『論語抄』について、諸本の系統や資料性を明らかにした。『良賢抄』の写本が、東山本・大東急本、両足院本・米沢本の2系統に分けられること、口語資料としては前者が有用であるが、東山本には多くの脱落・誤写があり、利用の際は他本との校合が欠かせないことを指摘した。第2章から第4章では、『三体詩』の抄物について論じた。第2章では、これまで看過されてきた駒沢大学図書館蔵『三体唐詩絶句鈔』が、抄物の中心的な作製者である桃源瑞仙の抄であることを示した。第3章では、前章の成果を活用し、学会未紹介の国立国語研究所蔵『絶句抄』が、『桃源抄』を取り込み成立した妙心寺系統の「三体詩抄」であることを論じた。第4章では、東京芸術大学附属図書館脇本文庫に収蔵される『三体詩』の抄物が、希世靈彦の抄であることを突き止め、諸本間の関係や言語的特徴を明らかにした。以上のように、綿密な調査に基づいてそれぞれの文献の成立事情を解き明かしたことに加え、言語資料としての有用性を示した点に十分な学術的意義が認められる。

第II部では、抄物資料を中心に助詞や副詞の歴史的变化を描いた。五山僧らの手による関西系の資料に加え、関東を中心に曹洞宗の僧が作成した「洞門（とうもん）抄物」をも活用した点でも有意義である。第1章では、助詞マデの限定用法の特徴を明らかにしたうえで、序列に基づく排他性を示す当該用法は、マデが述部で節を受けるようになった結果、限度を表す用法から生じたこと、限定用法が文末で多用されることで評価的意味が焼き付けられ、マデダへと連なるモダリティ形式となったことを論証した。第2章では、助詞ヨリ・カラに動作主への敬意を含む「主格用法」を認めるロドリゲス『日本大文典』の記述を抄物資料の用例によって検証し、当該用法の成立過程を論じた。第3章では、コンピュータのダ・ヂヤを用いた並列形式について、その使用実態を明らかにし、これらの並列形式化の経緯が「引用句派生の例示」と呼ばれる変化のモデルと一致することを述べた。第4章では、副詞タシカについて、タシカが「推測内容の不確かさ」を表す副詞としてタシカニとの対比の下で成立した後、次第に「想起内容の不確かさ」を表す専用の形式となっていったことを述べた。第5章では、納得するさまを表す副詞「道理デ」について、先行文と後続文の因果関係を説明する副詞として使われ始め、次第に発話時における新たな認識を表す用法へと傾いていき、納得感を表す用法に特化していったことを述べた。いずれの現象に対しても、用例に基づいた実証的で手堅い論が展開されており、きわめて高い説得力を有するものと言える。

以上のように、本論文は、文献学的研究をふまえた言語史研究のモデルとも言える貴重な成果であり、今後のさらなる発展も大いに期待される。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士

(文学) の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。